

「児童の世紀」を振り返る

その一

本田 和子



幕を開ける前に

「二〇世紀は女性と児童の世紀である」。こんなキャッチフレーズのもと華々しく幕を開けた今世紀も、後、僅かで幕を下ろそうとしている。「児童の世紀」と呼び慣らされたこの一〇〇年の時間のなかで、

私たちは、「子ども」に関して何を成し遂げ、また、何を失ったのであろうか。このあたりで、今世紀を振り返り、私たちの生きたこの時代と子どもとのかかわりを考えてみることも無駄ではないだろう。

「児童の世紀」というこのアトラクティブな言葉は、周知のように、スウェーデンの女流思想家エレン・ケ

イの同名の書に由来している。同書の発行は、一九〇〇年、直ちに独・仏・英の各国語に訳されて西欧諸国への進出を果たし、わが国の場合も、一九〇六年に独語版からの訳出がなされた。

しかし、同書が、果たしてどれだけ多くの人々に読まれ、また、その思想がどの程度に理解されたかは定かではない。しかし、「今世紀は、子どもの世紀となるべきである」と謳い上げられた彼女の主張は、論旨・論の展開・そしてそれにかわる諸経緯など、とりあえずは捨象されたまま国境を越えて広く世界中に広がり、児童中心主義的諸運動の指針とされてきたことは確かであろう。

「児童の世紀」という言葉と、それによって喚起されるイメージと概念に対して、私たちの世紀は、極めて柔軟かつスムーズであり、子どもを中心に位置させることにいささかの抵抗も示さず、むしろ、欣然とそれを受け入れたのであった。もしかしたら、児童中心の

時代を迎え入れるべく、何らかの合意が形成されていなくても言うのだろうか。今世紀の幕を開ける前に時間を過去へと遡って、こうした土壌形成に無縁とは思われぬ知的動向のあれこれに、目を向けてみようとするのはこの所以である。

「子どもの発見」と「進化の発見」

近代的な意味での「子ども」の発見を、農業への依存から脱して工業化社会へと転換し始めた、十七、八世紀の西欧社会に見るのは、最近の歴史学の定説であろう。そして、わが国の場合も、わが国流の特殊性を認めた上で、江戸時代中期に新しい「子ども観」の蠢動を見ることは、おおよそ妥当であろうとされている。この時代に、北半球的文化の発達した地域では、「子ども」は「小さい大人」であることを止め、「子ども期」という特別な時間のなかに囲い込まれ始めたのである。

「子ども期」という囲われた時間の出現は、同時に、「学校」という囲われた空間を発生させる。「保護」と「教育」の対象として特別の生活を用意され始めた子どもたちは、そのための、大人一般とは異なる時空間を必要とする存在へと変貌を余儀なくされたのであった。「学校」とは、大人と子どもの分離の進行した時代に、子どもたちを保護隔離し、一定のモデルに従った大人へと成長させるための社会的装置に他ならない。「極言の誇りを恐れずに言うなら、一種の「ゲッター」とも言うべき「囲い込み」の装置。。ただし、その囲い込みは、新しい社会成員の形成のためには最も効率的・効果的な仕組みであったから、時代の心性は、まずはそれを肯定し、子どものための不可避の営みとして受け入れたのであろう。

しかし、発足した「学校」は、果たして子どもたちに相応しい生活を保証し得ていたであろうか。一八世紀後半から、一九世紀前半にかけて、ルソー、ペスタ

ロッチ、フレーベルなど、新教育論者の出現が目立つが、労働や遊び、自然な生活など、彼等が主張したのは、いずれも現行の学校教育の外に子どもを解放する提言であった。「子ども」という存在を

「保護」と「教育」の対象と化させた近代は、しかし、早々にその在り方に疑問を抱き、それを巡って種々の模索を開始したとも言い得よう。

時代のまなざしの前に、「子ども」は、特別の意味を付与されて浮上してきたが、しかし、彼等の処遇に関して、様々に疑念が呈され始め、いまだ、社会的合意が形成されていない、というのが実情だったらしい。そんな状況下に、社会全体を揺り動かして、衝動的なデビューを果たしたのが、「進化論」である。

それは、来るべき時代に相応しく、「自然科学」の



学説という衣裳をまもっていたが、単なる学説であることを越えて、新しい「世界観」として、すべての人々に、まなざしの更新を要請した。何しろ、万物は神の被造物ではないかも知れないと言うのだから。人間は、神に似せて造られたのではなく、もろもろの生物の進化の果てにあり、自然淘汰・適者生存を繰り返しつつ現存する。人々に訪れた新しい思想は、こう語って、人と世界を神の絶対から解放するのに手を貸そうとしたのだった。

いま存在している当代の人間にまして、自然淘汰と適者生存の所産たる次代の人々はより進化した状態で出現する。したがって、人間という存在は、過去から未来へと進歩の相を呈し、より優れた社会を招き寄せることは必定である。というわけで、「進化」と「進歩」が結託し、さらには「進化・進歩⇨価値」とする楽天的未来観が胚胎される。それが、世紀末の閉塞状態にあった人々のなかで、新しい希望へと転化させら

れたであろうことは想像に難くない。このとき、進化論は、自然科学分野における新仮説であることを越えて、広く大衆性を獲得し、通俗的世界観として時代の心性を支配した。

「進化論」というより「進化的社会思想」が、「子ども観・教育観」と手を結ぶのに何ほどの時間も必要とはしましい。何しろ、次代の人間に一層の進化が期待されるとすれば、子どもは大人にまして価値を持つ。それに、適者生存というかたちで生存競争の原理が推奨されるなら、子どもの養育に従来以上の意義が付託されることも自明である。「進化⇨価値」という結合は、「子ども⇨価値」という結合を促す。以後、発見された「子ども」は、単に大人との異質性において注目されるのではなく、大人に勝るその価値において顕在化されることになる。十九世紀の終わりに、人々の世界観をゆさぶった科学思想は、思わぬ波及効果を「子ども⇨大人関係」の上にもたらしたのであった。

エレン・ケイの「子ども論」と

「進化論的優生学」

児童中心主義の基盤をダーウィンの進化論に見るとは、いささか奇異に過ぎるとの誇りを免れ得ないかも知れない。しかし、今世紀を「児童の世紀」と謳い上げたエレン・ケイ自身が、進化論、なかでも遺伝学説に傾倒し、それに依拠しつつ人種改良を企てたことは周知であろう。彼女の「児童中心思想」においては、人種改良の所産として生まれ出る筈の優良人種によつてのみ未来は信じるに値するものとなるのだから。

そのゆえにこそ、来るべき世紀は「児童の世紀」とならねばならない。遺伝的に劣性を帯びた子どもを世に送り出さないこと、いわゆる「優生学」の普及・徹底が先ず二〇世紀の第一義的な営みであり、さらに、よい生殖行為の所産として出現した優れた種を健全に育成すべく、養育者としての「母性保護」が課題となる。彼女が華々しく謳い上げ、そのゆえに、いささか

ならずロマンティックな響きとと

もに世界を席卷した「婦人と児童

の世紀」とは、自然科学的新学

説、すなわち進化論と遺伝学説に

導かれた、かなりの程度に合理主

義的、かつ、ドライなものだった

のである。しかし、ブレードヤ

キーツなど、ロマン派の詩人たちに主導された一八世

紀の「児童中心思想」とは異なり、この合理主義的な

かにこそ、いかにも科学の時代たる二〇世紀への相応

しさを見るべきであろう。

彼女に大きな影響を与えたとされる遺伝学者ゴール

トンには、ダーウィンの従兄弟、メンデルらに代表され

るような生物学的遺伝研究の分野を人間に拡充し、統

計的手法による「遺伝的天才」の研究を試みて、後に

優生学を提唱した。天才の家系からは多くの天才が輩

出し、よい遺伝子の組み合わせがよい子孫を生み出



す。こうした新説が、生物学の世界から社会学の分野へと進出してきたとき、若き婦人運動家エレン・ケイが、それに共鳴し熱い賛同と支持を表明したとしても不思議ではない。彼女は、卓抜した読書家であつたとされるが、いまだ無名のイブセンを愛読・評価し、スペンサー、ミル、ルソー、あるいはニーチェなどの著作に親しんでいたと言われる。そんなとき、書齋に飛び込んできたのが、当代の世を騒がしつゝある新学説、進化論とゴルトンの研究成果だったのである。

遺伝研究の所産として、科学の名においてなされたメッセージに、彼女の若い魂は魅了された。『児童の世紀』のなかに次のような主張がある。「わたしは人間性は改変し得ると信ずる。尤も、わたしの言うこの改変は、全人類がキリスト教信者になつたからとて到達されるものではなく、ただ、全人類がほんとうに目ざめて、子どもを産むことの神聖であることを自覚する時をまづはじめて到達されるのである。この自覚

がほんとうに成り立てば、子供及びその発生、その処置、その教育に関する事柄が、社会の中心的な仕事となり、すべての道徳、すべての法律、すべての社会施設が、それらの事柄の周囲に集まつて来るであらう」。

ロマン派の詩人とは異なり、エレン・ケイの心を占めたのは、現存する子どももの無垢な美しさや汚れなさではなく、「生殖」という行為の神聖さであつた。私どもは、ここで、彼女の営みにおいて、子どもと女性と恋愛・結婚の三つが併存し、等価的に位置づけられていることの意味を理解することが出来る。そして、『児童の世紀』『恋愛と結婚』『婦人運動』の三部が、エレン・ケイを代表する著作とされているのもこの所以であらう。

(聖学院大学)